

# 音楽科学習指導案

科目	授業学級	授業場所	使用教科書	授業者
音楽理論	1年7組(音楽科) 39名	芸術棟2階 音楽室2	「明解 新楽典 ～音楽を志す人々のために」 (音楽の友社)	濱田 淳一

## 1 題材 「音階・調について知ろう」

### 2 指導目標

- (1) 音階・調の理論が演奏に不可欠な楽曲分析の基礎になるということを理解させ、主体的に演習に取り組ませる。
- (2) 音楽を構成する要素である音階・調について正しく理解させ、既知の楽曲等を用いて音階・調に関する分析をさせる。

### 3 題材の評価規準

- (1) 音階・調の理論に興味・関心を持ち、主体的に演習問題に取り組もうとしている。
- (2) 音階・調の仕組みを正しく理解し、楽曲分析やソルフェージュに活かすことができる。

### 4 研究テーマとの関連

音階・調について学習することで、音楽理論の理解に必要な基礎知識を身に付けるとともに、各自が専攻し、専門で学習している楽曲を音階・調という視点から分析することで、知識技能と表現活動を結び付けて音楽を捉える契機とする。

### 5 題材について

#### (1) 題材設定の理由

西洋音楽理論の主要をなす音階・調の理論を学習することで、楽典の基礎を身につけさせるとともに、演奏の際に不可欠な楽曲分析を行う上で、音階・調の理論が必要な知識であることを理解させ、表現と鑑賞に活用する能力を養うことを目的として、本題材を設定した。

#### (2) 教材について

##### ア 教材名

「明解 新楽典 ～音楽を志す人々のために」(音楽の友社)より  
第4章 音階と調

##### イ 指導観

音階・調の学習は楽典の基本を成すものである。現在、我々が日常的に触れる楽曲や、生徒たちが学習している楽曲の大部分が、音階・調の理論をもとに作曲されているものである。また、大学入試において配点・難易度ともに高い調判定の設問も、この音階・調の理論を十分に理解していなければ解答することができない。本題材の学習を通して音階・調の理論が演奏に不可欠な楽曲分析の基礎になるということを理解できるよう指導する。

## 6 生徒の実態

明るく活発な生徒が多いが、授業中は比較的小となしいクラスである。専攻の内訳はピアノ7人、管打楽器28人、作曲1人、声楽3人である。入学以前の音楽の基礎・基本の定着状況については、音楽科の生徒ということと考慮すると必ずしも十分とは言えず、ソルフェージュの基本的な記譜等についても身に付いていない生徒が多くみられる。しかし、入学後は授業でしっかりと学ぼうとする姿勢が強く、集中して取り組んでいる。

## 7 指導に当たって

小学校・中学校時における学習内容を含め、音楽の知識が音楽科生としては十分に身に付いているとは言えないため、個の理解度に配慮した丁寧な指導を行いたい。

## 8 指導計画（6時間扱い）

第1次 学習目標を確認し、音階と調の理論を身に付けさせる。

第2次 近親調と移調について学習し、既知の楽曲等を用いて音階・調に関する楽曲分析をさせる。

第3次 演習問題を通して、音階と調の理論の定着を図る。

※指導上の留意点は、全て上に揃える。

次	時	目 標	題材の評価規準との関連	指導上の留意点
1次	1	○ 音楽を構成する要素である音階・調について正しく理解させる。 ・ 調名と音階名(dur)について理解する。	観点1-①・③	五線譜や視聴覚機器・教材を活用する。
	2	○ 音楽を構成する要素である音階・調について正しく理解させる。 ・ 調名と音階名(moll)について理解する。 ・ 練習問題を実践する。 ・ 調号の仕組みを理解する。 ・ 五度圏について理解する。	観点1-①・③	五線譜や視聴覚機器・教材を活用する。
2次	3 本 時	○ 音楽を構成する要素である音階・調について正しく理解させる。 ・ 1次の学習内容を復習する。 ・ 音階構成音について理解する。 ・ 既知の楽曲を用いて演習を実践する。	観点1-①・③ 観点2-①	五線譜や視聴覚機器・教材を活用する。
	4	○ 近親調について正しく理解させる。 ・ 属調について理解する。 ・ 下屬調について理解する。 ・ 平行調について理解する。 ・ 同主調について理解する。 ・ 練習問題を実践する。	観点1-②・③ 観点2-②	五線譜や視聴覚機器・教材を活用する。
	5	○ 移調について正しく理解させる。 ・ 移調の実践例を学ぶ。 ・ 練習問題を実践する。	観点1-②・③ 観点2-②	五線譜や視聴覚機器・教材を活用する。
3次	6	○ これまでの学習が、正しく理解できているか確認させる。 ・ 教科書の演習問題を実践する。 ・ 主科の練習曲や既知の曲を用いて、音階や調号を理解しているか復習する。 ・ 教科書の総合問題や過去の入試問題等で演習を実践する。	観点1-③ 観点2-①・② 観点3-①	過去の入試問題等を準備する。

## 9 評価計画

学習活動における具体的評価規準		想定される学習状況と手だて
		A 「十分満足できる」と想定した生徒の状況 C 「努力を要する」状況と判断した生徒への手だて
観点1 関心・意欲・態度	① 音階と調の理論に興味・関心を持っている。	A 教科書の練習問題に積極的に取り組んでいる。 C 親しみやすい楽曲を用いた演習の取り組みをさせる。
	② 近親調と移調に興味・関心を持っている。	A 教科書の練習問題に積極的に取り組んでいる。 C 親しみやすい楽曲を用いた演習の取り組みをさせる。
	③ 主体的に演習問題に取り組んでいる。	A 教科書の総合問題等に積極的に取り組んでいる。 C 親しみやすい楽曲を用いた演習の取り組みをさせる。
観点2 基礎的な理論の理解	① 音楽を構成する要素である音階・調について正しく理解している。	A 教科書の練習問題を概ね正しく解答できる。 C 調号の少ない調を設定して演習課題を与える。
	② 近親調と移調について正しく理解している。	A 教科書の練習問題を概ね正しく解答できる。 C 調号の少ない調を設定して演習課題を与える。
観点3 表現と鑑賞に活用する能力	① 教科書の総合問題や過去の入試問題等、主科の練習曲や既知の曲を用いて、演習に積極的に取り組んでいる。	A 教科書の総合問題や主科の練習曲の分析に積極的に取り組んでいる。 C 親しみやすい楽曲を用いた演習の取り組みをさせる。

## 10 本時

### (1) 目標 (3/6)

- ア 調名と音階について再確認をし、音階構成音について理解する。
- イ 既知の曲の音階分析を行い、音階・調の理論を理解する。

### (2) 本時の評価規準

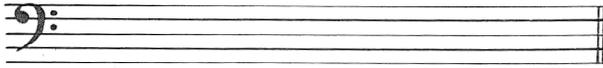
- ア 調号 (嬰種・変種), 音階構成音について理解しようとしている。
- イ 既知の曲の音階分析に主体的に取り組み、音階・調の理論を理解することができる。

### (3) 展開

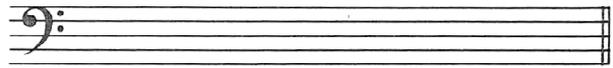
過程	学習内容	時間	指導上の留意点 (・は評価の観点)	備考
導入	1 前時までの学習内容の再確認をするとともに、本時の学習の目的を知る。	2	○ 楽典における音階・調の理解の重要性を伝える。	
展開	2 音階構成音の名称について知る。	4 5 (5)	○ C dur の音階に全音と半音の記号を記入させる。  ○ G 音を与え、長音階を完成させる。(調号を用いずに) ・ 音階の仕組みに興味を持っているか。 ・ 音階の仕組みを理解できているか。	ホワイトボード
	3 演習問題を解答する。	(20)	○ 教科書の問題を指示する。 ・ 正しく解答できているか。	楽譜の準備
	4 楽曲のメロディーにおける音階の分析をする。	(20)	○ 5曲の曲名を例示し、共通点を考えさせる。  ○ 様々な名曲も、音程及び音階の組み合わせで、メロディーが構成されていることを認識させる。 ・ 学習内容と楽曲との関連に興味を持って課題に取り組んでいるか。	
終末	5 本時のまとめを行い、次時の予告を聞く。	3	○ 本時の学習内容のまとめと、次時に向けての課題を確認させる。	



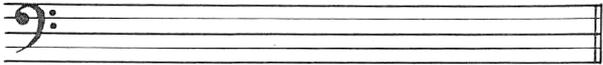
7. b moll の音階(和声)



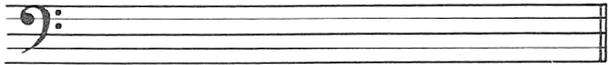
8. gis moll の音階(和声)



9. c moll の音階(旋律上行形)



10. c moll の音階(旋律下行形)



#### IV 音階構成音の名称

各音階構成音は調を確立するためにそれぞれの働きを持っており、その働きに応じて次のようによばれる。

##### 譜例 7

C dur (c moll) の音階



主 上 (上) 下 (上) 下 導 主  
音 主 中 属 属 中 音 音  
音 音 音 音 音 音 音 音

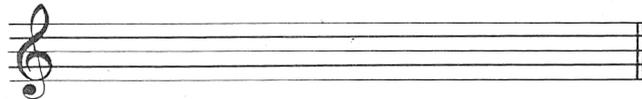
注 自然短音階の VII は 1 オクターヴ上の主音と長 2 度になるところから下主音とよばれる。

これらの音階構成音のうち主音、属音、下属音は調を確立するために特に重要な働きをする。

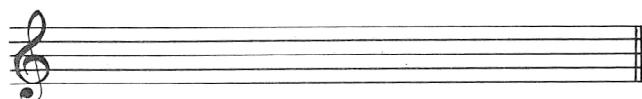
問題 3 次の音を指示された音階構成音とする音階を調号を用いなくて作りなさい。

(1) 長音階をつくりなさい。

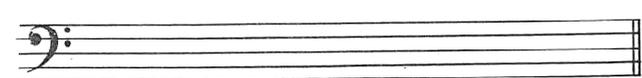
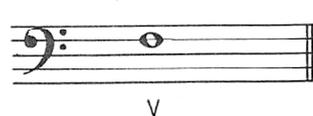
1. 導音



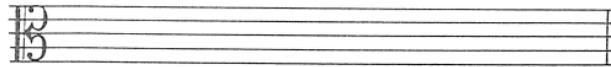
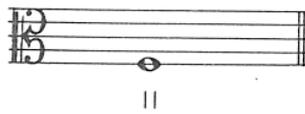
2. 中音



3. 属音

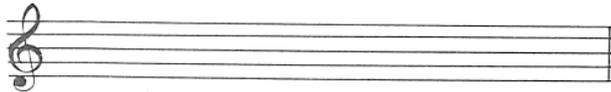
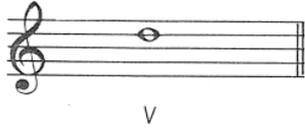


4. 上主音

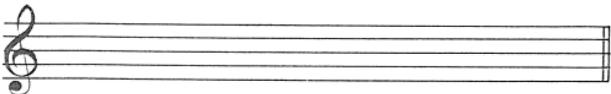


(2) 短音階をつくりなさい。ただし旋律短音階は上行形によるものとする。

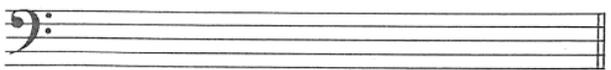
1. 属音(和声)



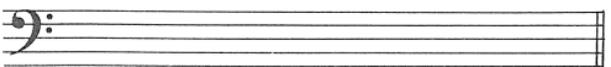
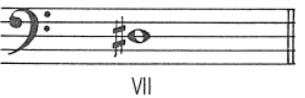
2. 上主音(旋律)



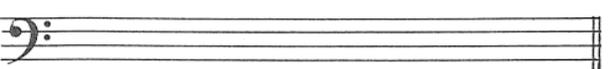
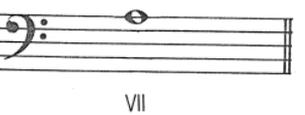
3. 中音(和声)



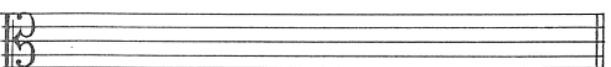
4. 導音(旋律)



5. 導音(和声)



6. 下中音(旋律)



## V 調号

音階構成音中に含まれている派生音をまとめて音部記号の次に記入したものを調号という。調号によって示された音階構成音をその調の固有音という。

### (1) ♯系(嬰種)の調号

#### イ) 長調の調号

C dur の V (属音) を主音とする調は ♯ 1 個の調号を持つ G dur である。また G dur の V を主音とする調は ♯ 2 個を調号として持つ D dur である。このように主音を完全5度上におきかえていくと順次 ♯ 系の調号が導き出される。

## 譜例 8

C: I II III IV V VI VII I G: I II III IV V VI VII I D: I II III IV V VI VII I

## □) 短調の調号

a moll をもとにして長調の場合と同じようにすると短調の  $\sharp$  系の調号が順次導き出される。

## 譜例 9

a: I II III IV V VI VII I e: I II III IV V VI VII I h: I II III IV V VI VII I

(2)  $\flat$  系(変種)の調号

## イ) 長調の調号

C dur の IV (下屬音) を主音とする調は  $\flat$  1 個の調号を持つ F dur である。また F dur の IV (下屬音) を主音とする調は  $\flat$  2 個を調号として持つ B dur である。このように主音を完全 5 度下におきかえていくと順次  $\flat$  系の調号が導き出される。

## 譜例 10

C: I II III IV V VI VII I F: I II III IV V VI VII I B: I II III IV V VI VII I

## □) 短調の調号

a moll をもとにして長調の場合と同じようにすると短調の  $\flat$  系の調号が順次導き出される。

## 譜例 11

a: I II III IV V VI VII I d: I II III IV V VI VII I g: I II III IV V VI VII I

各調の調号\*を整理すると次のようになる。(○は長調の主音, ●は短調の主音を示す。)

譜例12

♯系の調号



C dur G dur D dur A dur E dur H dur Fis dur Cis dur  
 a moll e moll h moll fis moll cis moll gis moll dis moll ais moll

譜例13

♭系の調号



C dur F dur B dur Es dur As dur Des dur Ges dur Ces dur  
 a moll d moll g moll c moll f moll b moll es moll as moll

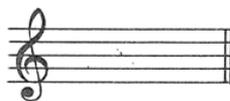
短調の調号は、その短調の主音の短3度上の音を主音とする長調の調号と同じである。

問題4



を指示された音階構成音とする調を調号と主音で示しなさい。

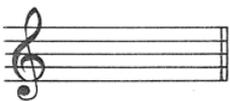
1. 主音(I)とする長調



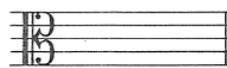
2. 上主音(II)とする短調



3. 中音(III)とする短調

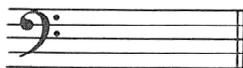
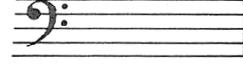
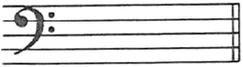
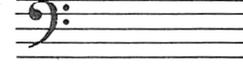


4. 中音(III)とする長調



\* ハ音譜表上の調号の例

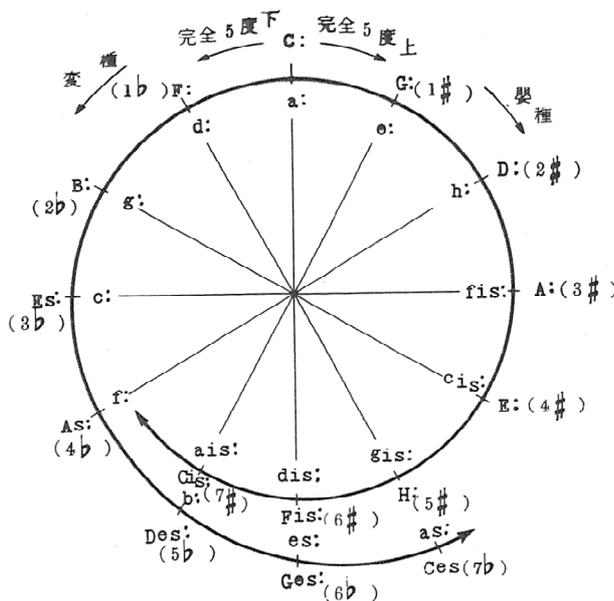


5. 下屬音(IV)とする短調		6. 属音(V)とする短調	
7. 下中音(VI)とする長調		8. 和声短音階の下中音(VI)とする短調	
9. 導音(VII)とする長調		10. 導音(VII)とする短調	

### (3) 五度圈

調の関係を示した図表を五度圈という。

図表 1



図表 1 に示されたように H dur と Ces dur, Fis dur と Ges dur, Cis dur と Des dur, gis moll と as moll, dis moll と es moll, ais moll と b moll はそれぞれの音階構成音が異名同音の関係にある。このような調の関係を異名同音調という。

## VI 近親調

楽曲の中心になる調を主調といい、主調の属調、下屬調、平行調、属調の平行調、下屬調の平行調、同主調を近親調という。

### (1) 属調

主調の属音 (V) を主音とする同系調<sup>\*</sup>を属調という。例えば C dur の属調は G dur, c moll の属調は g moll となる。

\* 長調と長調, 短調と短調の関係を同系調という。

## 譜例14

主 調	属 調
C :	G :
主 調	属 調
c :	g :

## (2) 下屬調

主調の下属音（IV）を主音とする同系調を下屬調という。例えばC durの下屬調はF dur, c mollの下屬調はf mollとなる。

## 譜例15

主 調	下 属 調
C :	F :
主 調	下 属 調
c :	f :

## (3) 平行調

調号を同じくする異系調<sup>\*</sup>を相互に平行調という。例えばC durの平行調はa moll, a mollの平行調はC durとなる。

平行調の関係にある2つの調の固有音は同じであるが主音の位置は短3度のへだたりをもっている。

## 譜例16

C :	a :

## (4) 同主調

主音を同じくする異系調を相互に同主調という。例えばC durの同主調はc moll, c mollの同主調はC durとなる。

\*長調と短調の関係を異系調という。